

積極的ポライトネスにおける「ほめる」行為—ジェンダーの視点から*

瀬田 幸人 ・ 木田 祥恵**

ことばの意味をその前後の文脈や会話の参加者、話された状況など様々な側面を考慮して捉えようとする学問分野に語用論がある。この研究領域の中で、20年ほど前からポライトネス (politeness) ということばが頻繁に現れるようになってきている。様々な研究者によってポライトネスが論じられ、またその公理や理論となるものが提唱されてきた。中でも Brown と Levinson のポライトネス理論は、「ポライトネス」研究の発展に大きく貢献したと考えられる。

本稿では、彼らのポライトネス理論に基づき、ジェンダーの観点から「ほめる」という言語行為に注目して、実際の談話を分析し、日本では「ほめる」行為はジェンダー・イデオロギーとして「女性」と深く結びついていることを示す。

Keywords : 積極的ポライトネス, ほめる, ジェンダー

0. はじめに

Brown and Levinson (1987) (以後B&Lと略記) のポライトネス理論が一際多くの研究者の目を引き、革新的であった理由の一つに、「積極的ポライトネス」(positive politeness) というポライトネス・ストラテジーの導入がある。それは、話者から相手への積極的な好意を示すための表現と説明される。彼らは、日本語では「丁寧さ」と訳されるポライトネスが、優先的に含意する言語形式上の丁寧表現「消極的ポライトネス」(negative politeness) と、積極的ポライトネスの両方をポライトネスの構成概念とし、それまでの研究より包括的な捉え方を可能にしたのである。

本稿では、B&Lのポライトネス理論におけるポライトネスの定義を、Usami (1999) に倣い、「円滑な人間関係を確立・維持するために機能する言語行動」とすることが適切であると考ええる。

1. Brown & Levinson's Politeness

ポライトネスに関する諸説の中でも、最も影響力があり包括的であるとされているB&Lのポライトネス理論には、「フェイス」(face) という鍵概念が

存在する。これは、Goffman (1967) によって触発された概念ではあるが、彼ら独自の視点から捉えられている事を理解する必要がある。まずは、Goffmanが論じているフェイスを確認しておく。

- (1) ... the positive social value a person effectively claims for himself by the line others assume he has taken during a particular contact. Face is an image of self delineated in terms of approved social attributes - albeit an image that others may share, as when a person makes a good showing for his profession or religion by making a good showing for himself.

Goffman (1967: 5)

このGoffmanの提唱するフェイスという概念を基礎に、フェイスを人間の基本的欲求としての「積極的フェイス」(positive face) と「消極的フェイス」(negative face) の二つに分け、以下のように定義し、彼らのポライトネス理論の中で用いている。

岡山大学教育学部英語教育講座 700-8530 岡山市津島中3-1-1

Complimenting in Positive Politeness—From the Viewpoint of Gender

Yukito SETA and Yoshie KIDA**

Department of English Language Teaching, Faculty of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Okayama 700-8530.

**Graduate School of Education (Master's Course)

- (2) negative face: the want of every 'competent adult member' that his actions be unimpeded by others.

positive face: the want of every member that his wants be desirable to at least some others.

B&L (1987: 62)

B&L (1987) は積極的フェイスと消極的フェイスを定義し、これらのフェイスに訴えかけるストラテジーをそれぞれ「積極的ポライトネス」、「消極的ポライトネス」とした。ここで注意すべきは、彼らの「フェイス」という概念の捉え方である。日本語では“positive”, “negative” にそれぞれ「積極的」、「消極的」という訳語が与えられているが、この訳語は誤解を生じやすく、特に「消極的」といった場合、決して否定的な意味が備わっていないことを十分理解しなければならない。宇佐美 他 (2001: 70) は、積極的・フェイスと消極的・フェイスをそれぞれ以下のように説明している。

- (3) 「ポジティブ・フェイス」とは、他者に理解されたい、好かれたい、仲間だとみなされたい、つまり、「他者に近づきたい」という「プラス方向への欲求」である。一方、「ネガティブ・フェイス」は、他者に邪魔されたり、立ち入られたくない、つまり、「他者と一定の距離を置きたい」、ここから先へは踏み込んでほしくないという「マイナス方向に関わる欲求」として捉えられる。

また、“face” それ自体の訳語やその概念の普遍性に関しても、多くの誤解が生まれている。

以下の文は、B&Lの“face”に関する記述である。

- (4) we are assuming that the mutual knowledge of members' public self-image or face, and the social necessity to orient oneself to it in interaction, are universal.

B&L (1987: 62)

この訳語に対する誤解というのは、Goffman (1967) の提唱する“face”が、一般的には「面子」や「顔」と訳され、中国語や日本語のそれに近いものとして理解されることに関係している。つまり、それらの訳語では、各国の文化に固有なものという解釈を反映する可能性が高いため、B&Lが用いている

“face”の訳語には、片仮名表記の「フェイス」が用いられているのである。しかし、そのような配慮にもかかわらず、各文化に固有の「面子」や「顔」の概念と混同したまま捉えられ、欧米文化を基にした枠組みの中では、複雑な敬語体系を持つ言語には適応できないとの批判が、アジア諸国の研究者たちから相次いだ。確かに、何が面目を保ったり、失ったりすることにつながるのか、何が相手を思いやることになるのかなどは、各々の国や文化によって異なるが、このようなことは、フェイス侵害度を見積もる公式の中に文化差がパラメーターとして組み入れられていることで解消される。彼らの理論は、その公式で割り出されたフェイス侵害度などによって言語行動が決定されるというものである。宇佐美 (2001: 23) が指摘しているように、表面上のポライトネスの現れ方に文化差はあれ、それらの言語行動を引き起こす原因となっているのは、「相手の二種類のフェイスに訴えかけたり、配慮したりするという対人コミュニケーション上極めて重要な行動であり、そのような行動を引き起こす動因は、普遍的である」という認識が適切であると述べ、そのようなフェイスの普遍性への批判を強く疑問視している。B&Lのポライトネス理論で用いられる「フェイス」は、Goffmanにより触発されているとはいえ、彼ら独自の定義が与えられている。つまり、Goffmanの「フェイス」と彼らが操作的に定義している「フェイス」とは厳密には別のものと理解すべきなのである。

このように、B&Lのポライトネス理論が、数あるポライトネスに関する公理や原則の中でも、文化差を考慮した様々な人間の言語行動にまで配慮した革新的かつ包括的な理論であることを理解した上で、本稿では、彼らの理論を基に、日本における「ほめる」という積極的ポライトネスの役割や位置をジェンダーの観点より考察していく。「ほめる」という具体的な言語行為を検討する前に、まずポライトネスに関わる言語行動とジェンダーを結びつける先駆けとなった研究について言及しておく必要がある。§ 1.1では、Lakoff (1975) の「言語と女性の地位」について述べる中で、言語行動とジェンダー研究のあり方を検討していく。

1. 1 Gender Differences in Politeness

これまで、フェイスの普遍性に対する批判を論じる中で、ポライトネスの文化差について述べた。ポライトネスは、各々の文化によって表面上の現れ方に違いが生じるという文化差についての多くの議論がなされると同時に、男女によってもポライトネスの表現の仕方やその度合い、頻度といったものが

異なるとの見解も多く見られるようになってきた。この流れを生み出した代表的な研究がLakoff (1975)であった。Lakoffが、女性は男性よりも“polite”であると主張したことをきっかけに、「ポライトネス」を性差と結びつけて分析する研究が後に多く続いた。Lakoff (同書)は、女性に特徴的な会話のスタイルを「女の言語」(women's language)という概念で捉えようとした。「女の言語」の特徴として、例えば、女性は「すてき」(adorable)、「すばらしい」(divine)のような「空っぽ」(empty)の形容詞を用いることを挙げている。以下の例で、(5)に関しては、男女ともに使用可能であるが、女性が用いる形容詞を含んだ(6)の発話は、話していることが基本的にはつまらなく些細なことであるという文脈で用いられるという制限が加わるとの説明がなされている。

(5) What a terrific idea!

(6) What a divine idea!

また、ポライトネスと直接関わっている特徴としては、女性は男性よりも相手の心理的な負担に配慮した、より丁寧な依頼表現を用いるということである。例えば、ドアを閉めるよう頼む場合は、命令形よりも、相手に決定権を任せたWill you (please) ~?や、相手に断る余地を与えているという意味でWon't you ~?などの依頼文を女性のほうが好み、特にWon't you please ~?のような依頼文は非男性的な響きが強いと述べている。(Lakoff (1975:19) 参照)ここでのポライトネスはB&Lの理論の中では、消極的ポライトネスに分類される。消極的ポライトネスのストラテジーの一つ目に、間接的な言語行為として、Can you (please) ~?などの例を挙げて、相手の邪魔されたくない(消極的フェイス)という欲求に配慮した間接的な依頼文を挙げている。Lakoff (上掲書)は、女性が男性よりも好んでこれらの表現を用いるのは、女性の社会的な地位が低いからであると述べ、さらには、これら女性に特徴的な「女の言語」が持つ総体的な効果は、「話し手自身の自信のなさを仄めかす」ものだと述べている。Lakoffのように、女性の言語使用をその社会的に劣った立場と関連付けて説明しようとしたモデルは後に強く批判されることとなった。

Cameron (1994)はLakoffのような研究を「欠陥モデル」(deficit model)と呼び、その性役割的ジェンダー観を批判し、女性の劣った言語観を世間に広めっていると指摘している。男女の言語行動の差を記述し、両者を、男性を規範、女性をその逸脱とし

て差異化しようとする研究は、性差別的であり、そもそも男女を両極端にある二項対立的な存在と捉える本質主義に基づいた性差研究にすぎないのである。(この点に関連して、下の(7)を参照。)

(7) われわれが記憶しておくべきなのは、調査結果の解釈を一般化し、女と男を対立させて説明しようとする試みの過程で、「男=人間=規範」「女=女という性=逸脱」という性差別的な二重基準が繰り返されたという事実である。

中村 (2001: 39)

2. Paying Compliments as Politeness Strategy

本節では具体的な「ほめる」という言語行動について検討していきたい。まず、本稿で使用する、様々な「ほめる」行為に関連することばの訳語を示しておく。“compliment”と“praise”は、それぞれ「ほめること／ほめ言葉」、「賛辞・賞賛」と区別する。また、“flattery”は「お世辞」とする。

2. 1 Within a Framework of Brown and Levinson (1987)

「ほめる」という行為は、他者に好かれたい近づきたいという積極的フェイスに配慮した「積極的ポライトネス」ストラテジーの一種であると考えられる。B&L (1987: 101-129) が提示している15の「積極的ポライトネス」ストラテジーから、特に「ほめる」という言語行動に関係していると思われるストラテジー(以下Sと略記)を検討していきたい。

最初のS-1では、相手の気づいてほしい、認められたいという欲求を満たすという「積極的ポライトネス」ストラテジーを挙げている。

(8) Strategy 1: Notice, attent to H (his interests, wants, needs, goods)

(a) Goodness, you cut your hair!

(b) What a beautiful vase this is!

B&L (1987: 103)

例文から見てもわかるように、相手の変化や持ち物に気づき言及することは、しばしば「ほめる」という言語行為につながる。さらに、S-2では強調したイントネーションや強勢を伴う発話を例に挙げている。

(9) Strategy 2: Exaggerate (interest, approval, sympathy with H)

(a) What a fantastic garden you have!

B&L (1987: 104)

相手を「ほめる」には誇張した表現をよく用いるようである。例えば、女性は著しく“really”, “very”などの強意語 (intensifiers) を多く用いるとの研究結果もある。(cf. Johnson and Roen (1992)) 注目したのは、ニュージーランドの自然な会話から採取した「ほめ言葉」を分析したHolmes (1995) が、ほめる時に用いられることばは、情緒的イントネーションを伴い、その統語構造に感嘆文が多いと記述していることである。

(10) Women used the rhetorical pattern What (a) (ADJ) NP! (e.g. What lovely children!) significantly more often than men.

Holmes (1995: 127)

Holmes (同書) の挙げる例は、S-2の例文でB&L (1987) が紹介した文の統語構造と同じである。つまり、ほめる際に用いる統語構造として、前述のような感嘆文が頻繁に用いられる可能性は非常に高いと言える。ただし、感嘆文のような統語構造を女性の言語使用と結びつけることは必ずしもここでは意図していない。明記すべきは、以上のことから、B&Lのいう「積極的ポライトネス」ストラテジーで最も顕著に「ほめる」という言語行動に関わっているのは、S-1とS-2であるということである。

2. 1 Within a Framework of Leech (1983)

ここでは、Leech (1983) の「ポライトネス」の公理に軽く触れておくことにする。Leech (同書) の提唱した「協調の原則」(Cooperative Principle) のうち最も有名な公理は「気配りの公理」(Tact Maxim) であるが、ここでは本研究に関連する「是認の公理」(Approbation Maxim) と「謙遜の公理」(Modesty Maxim) を取り上げる。下の (11), (12) に見るように、主に「相手への賞賛を最大限にすること」や「自分への賞賛を最小限にすること」が提示されている。Leech (同書) の場合にも、ポライトネスを定義する際に、「ほめる」という言語行動が必須であることが理解できる。

(11) The Approbation Maxim

a. Minimize dispraise of other

b. Maximize praise of other

(12) The Modesty Maxim

a. Minimize praise of self

b. Maximize dispraise of self

3. Paying Compliments in English

ニュージーランドの男女の自然な会話から生まれた「ほめ言葉」とその反応を調査した研究にHolmes (1995) がある。分析するに当たって、彼女は「ほめ言葉」を次のように定義している。

(13) A compliment is a speech act which explicitly or implicitly attributes credit to someone other than the speaker, usually the person addressed, for some 'good' (possession, characteristic, skill etc) which is positively valued by the speaker and the hearer.

Holmes (1986: 485)

Holmes (1995) は「ほめる」(compliment) という行為の役割を主に二つに分けている。(i)「情緒的」(affective) また「社会的」(social) な役割、(ii)「指示的」(referential) または「有益的」(informative) な役割である。(i) が「ほめる」行為の主要な役割であり、話者と聞き手との間の連帯感 (solidarity) を高め、または強化する働きのある積極的ポライトネスである。Holmes (同書) は、女性は(i)の役割においてよく相手を「ほめる」が、一方、男性は「指示的」(referential) または「有益的」(informative) な役割において「ほめる」という結論に至っている。

「ほめる」ということは「複雑な社会言語学的なスキルである」(Holmes (1988: 449)) という指摘にあるように、様々なコンテキストから、多用な「ほめる」という言語行為のもたらす効果や役割が考えられる。

(14) a. to express solidarity;
b. to express positive evaluation, admiration, appreciation or praise;
c. to express envy or desire for hearer's possessions;
d. as verbal harassment.

Holmes (1995: 125)

Holmes (1995) によれば、このような様々な役割が生まれる一つの理由に、「ほめる側」(complimenter) と「ほめられる側」(recipient) との関係があげられる。(14b) の「賛辞・賞賛」(praise) に関しては、ほとんど立場が上のものから下のもの (downwards) に対して行われる。例えば、下の

(15)のように先生が生徒を「ほめる」場合である。

(15) Teacher: This is excellent Jeannie. You've really done a nice job.

Holmes (1995: 119)

人間の上下関係が大きな要因であるということ、何らかのコンテキストでは「ほめる」ことも望ましくない、もしくは不快である可能性も高い。なぜならば、立場や地位が上のものから「ほめる」ということは、立場上の優位性を相手に主張することになり兼ねないからである。それでは、立場が下のものから上のものに対して「ほめる」場合についてはどうであろうか。この場合は、しばしば「お世辞」(flattery)であるという印象を相手に与えることになるだろう。このように、話者と聞き手との関係を考えると、「ほめる」という行為が必ずしも相互間の連帯を高めるのではなく、場合によっては好ましくない時さえあるという見解も可能となってくる。Holmes (1995) は「ほめる」という行為の暗い側面(darker side)についても言及している。例えば、あからさまな「ほめ」は、皮肉に聞こえることがある。また、B&Lが例に挙げているサモア島の文化では、相手を「ほめる」ことは、「ほめた」対象を話者が欲して(desire)いる、妬んで(envy)いることをほめかし、ほめられた側はそれを相手に差し出さ(offer)なくてはならないという義務がある。(B&L (1987: 247)) この場合は、「ほめる」行為は積極的ポライトネスではなく、邪魔されたくない、立ち入られたくないという相手の消極的フェイスを脅かす行為(face-threatening act=FTA)であると言える。とりわけ、男性をあまり「ほめない」ことや男性同士の「ほめあう」行為が少ないのは、男性が、「ほめる」行為を「積極的ポライトネス」ストラテジーの側面からではなく、「恥ずかしさ」(embarrassment)を助長するような行為(FTA)として捉える傾向が高いからであるとHolmes(上掲書)は説明している。(14d)のverbal harrasmentとしての役割とは、男性から女性への「ほめ言葉」を通してのセクシュアル・ハラスメント、つまり言葉の暴力である。

4. Paying Compliments in Japanese

「ほめる」という行為は日本の文化においても何ら珍しいものではない。日本語でも日常的に「ほめる」行為が行われているにも関わらず、下の(16)に見るように「ほめる」という行為のみを取り扱った研究はまだ数少ないと言える。

(16) ほめ言葉の頻度と反応は文化によって大きく異なるだろう。日本でもほめ言葉は人間関係をスムーズにする重要な働きをしている。しかし、ほめ言葉に関する日本語の調査を見つけることはできなかったが、日本ではほめ言葉を使う頻度は英語圏よりもずっと低いように思う。もしほめられたとしても、「そんなことはありません」と否定することが多いのではないだろうか。

中村 (2001: 63)

今回の研究の目的は、主に二つある。(i)日本語母語話者が、日々の生活の「ほめる」という行為について語る中で、「ほめる」ことでどのような「ジェンダー・アイデンティティ」(gender identity)を構築しているのかを探ること、そして、(ii)日本の社会における「ほめる」という言語行動に関する「ジェンダー・イデオロギー」(gender ideology)の解明である。これまで見てきたように、ジェンダーに関する研究において問題となってきたのは、性差研究のようにジェンダーを「違い」として解釈する本質主義的な見方である。本質主義で問題なのは、ある主体を男女という両極端の二項対立的な存在であると捉え、あらかじめ「女性」と「男性」をその人に備わっている属性と捉えて分類することである。これにより、ある主体がある特定の言語行動を行う理由付けとして「女性だから」という説明を可能にしてしまうのである。「ジェンダー・アイデンティティ」という概念は、本質主義での問題点を改善してくれると言える。我々は、中村(2001)等に従い、ジェンダーを、あらかじめ備わっている属性ではなく、我々があらゆる社会的な文脈の中で能動的に多種多様な言語行動を演じ、行う中で構築されるものと捉えることにする。

(17) アイデンティティはディスコースの原因ではなく結果である。われわれは、女だから、あるいは、男だから特定の話し方を選択するのではなく、ディスコースによって様々なジェンダー・アイデンティティを作り上げている。

中村 (2001: 113)

ジェンダー・アイデンティティは、ジェンダー・イデオロギーと密接な関係にある。同じく、中村(2001)の説明を以下に示す。

- (18) 実際のディスコース実践の中で作り上げられてきた様々な「ジェンダー・アイデンティティ」が、社会の権力関係の中で構造化されたものが「ジェンダー・イデオロギー」である。

中村 (2001: 115)

大切なのは、我々はあらゆる時代や社会や文化における文脈、そしてジェンダー・イデオロギーを考慮して主体的に「行為」(performance) (Butler (1990)) しているという見方である。今回分析する「ほめる」という言語行為に関しても、現代の日本社会においてどのようなジェンダー・アイデンティティ、そしてジェンダー・イデオロギーが存在するのかを探っていききたい。そのためには、現代の日本社会に生きる主体一人ひとりが、「ほめる」という行為について語るメタディスコース的な言語行動のデータが必要となる。参加者一人ひとりが談話会の中で自由に会話をし、日本語における「ほめる」と「ジェンダー」の関係性について意見交換するメタ言語的発話を分析することによって、日本社会に潜むジェンダー・アイデンティティ、ジェンダー・イデオロギーを検討していききたい。従って、本研究は、日本語の「ほめ言葉」の様々な表現について調査し、男女の「ほめ言葉」における言語使用の差を分析することが目的ではないことを再度明記しておきたい。

今回は、以上のような観点から、日本語母語話者の「ほめる」と「ジェンダー」の関係の意識調査を行うために、談話会を行なった。参加者は皆いづれも筆者達の知り合いで、筆者達と同じ大学で学んでいる4名の学生である。筆者の一人(木田)が録音される会話の観察者として参加し、不自然な会話の状況を助長するのではなく、参加者として自然な会話に加わり、自身の体験や意見を他の参加者同様語った。参加者全員には、データ収集の協力をお願いし、データ収集に関わる倫理上の問題に伴い同意書に記入してもらった。参加者は皆、普段より気兼ねなく話せるほどの親しさであることから、上下関係などの権力を意識することで発話に制限が加わることはない、自然な会話の言語データを得ることができた。談話会やその会話を資料として用いることや文字化に際し、参加者を尊重し、倫理上の問題にも配慮する目的で、本稿では分析に必要な研究記述に関連すると考えられる談話のみを採用した。

談話会の参加者を、皆知り合いに限定したのは、「私的」な場面を設定するためである。前述のように、我々は様々な社会的状況を踏まえ能動的に多様な言語行動を行う。今回はそのような社会的文脈を、大

きく「公的」と「私的」に分けて捉えることとした。今回の談話会は、「私的」な社会的状況と言えるであろう。繰り返すが、日常の社会的相互作用などから切り離された本質主義的観点では、「私的」、「公的」という社会的状況の中で多様に変化するジェンダー・アイデンティティを捉えることは不可能である。

5. Doing Gender by Complimenting

談話会の参加者は日々の生活の中で、日本語で「ほめる」ことでどのようなジェンダー・アイデンティティを構築しているのだろうか。また、現代の日本に存在するどのようなジェンダー・イデオロギーが彼らの会話から感じとることができるのだろうか。ここでは、実際に行われた会話を具体的に検討していく。

談話会では初め、「ほめる」という行為に関する調査であることは伏せ、まず季節がら、もう衣替えを済ませたかどうかについての話題から始めた。会話を進める中で、服装の話になり、参加者の服装で新しく購入したものについての話題へと移っていった。(なお談話で用いられている記号についてはAPPENDIXを参照。)

(19) 【談話1】「すごいかawaii①」

- ⇒ S: この前着とったあの茶色のやつは? 木曜日に着とった,
⇒ T: あれは買った。あれ< qq (名前)>のにちょっと似てない?
⇒ S: かなあ,
T: ちょっと似てない? なんか,
S: すごいかawaiiなあとと思って,
T: < H えっありがとう H >
S: 今年っぽいなあと考えた。
T: うそーありがとう。

(20) 【談話2】「すごいかawaii②」

- ⇒ 筆: 私はこれを、これ服じゃないけど買ってもらった。
T: < F でたーかawaiiー F > そのぶらさがりシリーズ
複数: おおー
O: すごい。
S: かawaiiなあ。
T: これ? これ? これ?
筆: ふん? あっこれこれこれそうです,
[< @@@@ >
複数: [< @@@@ >
T: かawaiiよなあ、そのネックレス、す

ごいかわいい、
S：うーん。
筆：ありがとう。
S：すごいかわいい。
筆：ありがとーありがとー。

これら二つの談話は、「ほめる」ということばを話題にする前の会話の中で自然に起こった「ほめ言葉」である。日本語の表現としてはいずれも、「かわいい」や「すごくかわいい」という発話がほとんどである。B&L (1987) が「積極的ポライトネス」S-2で上げている、誇張するという点で一致が見られる。また、「とても」という日本語は“very”という英語に訳されることを考えると、女性は著しく、“really” “very”などの強意語 (intensifiers) を多く用いるとの英語の研究結果とも共通しているようである。(Johnson and Roen (1992)) いずれの談話も、談話会の最初の時間帯で起こったことを考えると、「ほめる」という行為がいかに日本においても自然な日常化された言語行動であるかが見えてくる。

以上のような自然な「ほめる」行為が起こった後に、初めて筆者が「ほめる」ということばを口に出し、参加者それぞれに「ほめる」という行為について語ってもらった。「ほめる」行為に話題を絞ってからまもなく、「ほめる」という言語行動を女性に結びつける発言がいくらか観察された。

(21) 【談話3】「男同士のほめ合い①」

⇒ S：あっ男同士はないか、男同士で見んよなあ、
R：男同士は、
O：＜男同士でほめ合いっこしてるとかあんまない@@@＞
R：＜ないよなあ@@@＞
筆：そっかあ、
T：女の子は言うな、
S：言う言う、だって、
O：あっそれは確かに言いますね。

この談話の特徴は、「男同士は」、「女の子は」という語を用いて対立的に男女を比較することで、「ほめ合う」ことをするかしないかを語っている点にある。これによって、「ほめ合う」という行為は、女性同士に典型であることが強調され、＜S＞や＜O＞などの共感を得ている。次に挙げる談話も、同じく男同士の「ほめ合い」について語ったものである。

(22) 【談話4】「男同士のほめ合い②」

⇒ S：なんか男同士ではめ合よーるとちょっとどしたんって思うとこもあるよなあ、
R：多分男としてもあんましほめられてもなんか、男にほめられるのはなんか、い、[嫌じゃないけど、
O：[う、うーんってか<@@>
R：やっぱ、ねえ、
⇒ S：<@@変な、変な気持ちなん?>
⇒ O：なんか変な空気になります[よねえ。
R：[う、うん。

この談話から読み取れるのは、男性からの「ほめ言葉」は異様であるという意識が存在することである。「ほめ合う」行為だけでなく、「ほめられる」ことも違和感があるということになる。とりわけ、Rの「男にほめられる」という発言に注目したい。女性からではなく、男性から「ほめられる」ことで生まれる「変な空気」というのは、「ほめる」という行為を行う主体はほとんどの場合女性であるという固定観念を感じさせるものである。

(23) 【談話5】「コミュニケーション①」

⇒ R：(省略) んでみんながコミュニケーションとろうとしたら、やっぱりぱっと<XXXX(2)><咳き込む>
S：かもなあ、
S：でも男の<qq>はない、全然男の<qq>同士とかは。
複数：うーん。

(24) 【談話6】「コミュニケーション②」

⇒ O：ああ似合っとなるなあと思っときながら別に何も言わんときもありますよね。
⇒ R：＜Fそうそう、それはすごいあるねえF＞けー、変化には気づいてるんだけど、わざわざそれをなんかこう、<hx><L言わないL>、<A言わないっていうかA>、ほーっていうふうに、必ず＜FほめてF>コミュニケーションのその手段としてとか、<LはL>、
T：はあ、ふうーん。

談話6は、女性がなぜ頻繁に「ほめる」のかについて、それぞれが意見を交わす中で出てきた発話である。Mは、女性は「コミュニケーション」をとるために「ほめる」という行為を行うと考えている。また、「ぱっと」という言葉を用いていることから、女性が何の抵抗もなく「ほめ言葉」を言うことができること

を表現している。Rは談話会の間、女性の「ほめる」という言語行動を語る中で、「コミュニケーション」ということばを何度も用いている。このことから、Rは、女性が「ほめる」行為を人間関係を円滑に進めるための手段として活用していることを確信しているように思われる。Holmes (1995) も、女性は人間関係を築いたり保ったりするために、しばしば「ほめる」と述べている。つまり、「ほめ言葉」は、女性にとって人間関係を円滑に進めるための潤滑油“social lubricants”なのである。(Holmes (1995: 447))

- (25) women appear to use them as positive politeness device, and generally perceive them as ways of establishing and maintaining relationships, ...

Holmes (1995: 126)

(26) 【談話 7】「情報収集」

S: 違うなあもう、

R: そういう情報、

S: 情報収集じゃなくて、ほめ合いじゃでめっちゃ、それはおもしろいほんまに。

R: <FほめることはF><PうんP>

複数: へえー。

S: やっぱ女の人独特なんかなあ、<Pって感じがする。P>

談話 7 で、R や S は、「情報」ということばを使っている。興味深いのは、S が「情報収集」と「ほめ合い」を別のものとして区別していることである。ここでの「情報収集」とは前の会話の内容を受けている。例えば、ある人の持っている物に気づき、それに興味を持ったときに、その物をいつ買ったのかなどを聞く行為のことである。B&L (1987) の積極的ポライトネスの S-1 では、気づいてそれに言及することが挙げられている。Holmes (1995) は、「ほめる」行為の副次的な役割に「指示的」(referential)、「有益的」(informative) を挙げている。ところが、S の発言から解釈するに、何かに気づいても、その「情報」を聞き出そうとするような発言は、「ほめる」とは別個のものと捉えることができる。

さらに S は、「ほめる」ことは、「女の人独特」な言語行動という意見を述べている。女性特有なものとして「ほめる」という行為が認識されているのである。女性が独占的に持っている、女性に備わっている独特の言語行動だという固定観念が、談話 8 で見られるような「本能的」ということばが出現する理由

となっていると考えられる。

(27) 【談話 8】「本能的に」

⇒ S: なんか本能的に、似合っと思ったら、すっごいもうほんとぴったりのとかあるがん? その人っぽいの着と思ったら、にと、似あっとるなあと思って、ええなあって言う感じじゃけど、

O: ああ。

S: なんか、そんなそういう感じ、<P なんだろ P>

T: うんうんうん。

「ほめる」行為が「本能的」であるということは、生まれつき備わっている言語行動であることを含意する。「ほめる」という行為が、女性「独特」の「本能的」な言語行動であるという考えが、O や T に違和感なく受け入れられている。このような考えが、自然に受け入れられる社会では、「女性ならほめるべきだ」、とか「女性のくせになぜほめないのか」という差別的発言を生む可能性がある。

(28) 【談話 9】「男の方がほめ上手」

⇒ R: さっきの職業の話じゃないけど、やっぱり男も女も多分そういう同じような職業だったら、もしかしたら男の方がほめるん上手かもしれんよね、やっぱ、[<A すごいうんうん A>、

O: [ホストとかだってそのステップないですよええ。

R: 細かい男のほうが、もしかしてすごいやっぱ細かいから、仕事となると、

S: 美容師さんとかなあ、[そういう感じの人は違うよなあ。

R: [<A そうそうそうそう A>

R: なるけど、やっぱ素に戻ったときに、素の自分でほめれるかっていったらやっぱそれ女性の方が、なんか本能的に、うん、あると思う。

S: うん、うんそうじゃと思う、多分ホストの人とかも、めっちゃ意識しとんじやない?

R: うん、

O: でしょうねえ、

ここで想定されている「ほめる」という行為が起きている場所は、R の言う「職業」、「仕事」から明らかのように「公的」な場である。そして、「公的」な

場面での男性による「ほめる」行為に関しては、ある特定の職業を喚起させるようである。例えば、Oの発言にある「ホスト」やSの言う「美容師さん」である。ここで重要なのは、Rの発言の「素」ということばが、「私的」な場面を意味していると受けとれることである。この談話の初めに語られている「仕事」という「公的」な場面と対照的に「私的」な「素」という主体が語られている。そして「公的」場面で活発に「ほめる」行為を行う男性が、「素」という「私的」な状況では「ほめられない」という論を展開している。

(29) 【談話10】「一歩踏み出す」

- ⇒ O：想像したとき、そっちのほうがナチュラルですね、なんか、
R：＜DうんD＞
T：＜Pうん、確かにP＞
S：多分、抵抗なく、そういうことばが出るのは女なんかもしれん、やっぱし、
筆：ふーん、うん、
O：あっ確かに。
S：うん、うん、女じゃったら多分あっそんなにそんなに重きを置かずにほめとらんじやと思うんよ、なんか、すらっと、
筆：うん、うん、
S：（省略）男の人は、なんか＜F気づいてF＞、こう一歩踏み出す？ほめるっていうのに、あるんかも。
O：ああありますあります、ワンステップあります。
S：しれんなあ。
R&T：うーん。

ここで注目したいのが、Oは女性が「ほめた」方がナチュラル、つまり自然であると認識していることである。この意見は、談話8、9で観察された「本能的」ということばが関連しているように思われる。「ほめる」ことは、女性に「本能的」に備わっている行為であるから、当然女性はそのような行為をすると考えられるのである。女性にとって「ほめる」という行為は、「抵抗なく」できる自然な行為だという解釈にいたるのである。よって、「本能的」には備わっていない男性は、「ほめる」という言語行動を自然に行うことができない。したがって、「ほめる」ことに「抵抗」があり、「ほめる」には「ワンステップ」が必要なので、「一歩踏み出し」なくてはならない。そのような「抵抗」があることを顕著に現しているのが、「ほめられた」時の反応である。（談話11、12参照）

(30) 【談話11】「固まるか、ふざけるか」

- ⇒ 筆：＜DIM Oはほめられた時はどうすんの？ DIM＞
⇒ O：僕もリアクションだいぶ困りますねえ、なんかもう、完全ふざけますよねえ、
R：うん。
O：あざーっすみいたいな。
筆：＜F＜@@@@＞F＞
S：＜@あはははは@＞
O：＜@@@@＞
R：固まるかなあ、固まるか、ふざけるか、素直にありがたいとは、
O：＜@@＞固まるか、ふざけるかどっちか、

(31) 【談話12】「ワンステップのぼる元気」

- ⇒ O：もうほめられてる時点でうろたえてますからね、
R：ないなあ、
筆：＜@@@@@@＞
O：＜@@@@@@＞
R：＜@だって、思考停止に追いやら追いやられとるけー@＞
O：そこからまたあのほめるためのワンステップのぼる元気ないですよええ
筆：＜@@@@@@＞

ワンステップを踏み出さなければ「ほめられない」男性は、「ほめられる」ことも苦手だという意見が強く支持されている。また、「ほめられる」際の困惑を様々な語で表現しているのも興味深い。例えば、「ふざける」、「固まる」、「うろたえる」、「思考停止」などである。このようなことは、おそらく「ほめる」行為には、先に述べたB&L（1987）やHolmes（1995）の指摘するような「恥」（embarrassment）を生み出す行為（FTA）になる恐れがあることにも関連している。「ほめられた」時の「思考停止」になるほどの心理状態をどのように切り抜けるのだろうか。以下の談話13から検討したい。

(32) 【談話13】「その状況から逃げたい」

- ⇒ O：逃げません？けっこう、なんか、とりあえずその話切りたいみたい、
複数：あー。
O：＜@まずその状況から逃げたいみたい@＞
筆：ああ話題をそらすってこと？
O：はい。

「ほめられ」て、窮地に追い込まれたら、とにかくその状況から抜け出したいという意見が述べられている。この視点は、Herbert (1990: 209) の分類した「ほめられた」時の反応の一つと一致している。

(33) [11] NO ACKNOWLEDGMENT.

Addressee gives no indication of having heard the compliment: The addressee either (a) responds with an irrelevant comment (*i.e.*, TOPIC SHIFT) or (b) gives no response.

(34) 【談話14】「女化してくる男」

⇒ S: あうち大学んときになんかそういう感じで、なんか男の子がけっこうそういうのすんなり言える子とかが多かって、

O: うーん、

⇒ S: そんな時に、どしたんじゃろこの人らーってすごい思った、なんかやっぱなんかなんか<qq(地名)>もんはやっぱし、なんかぬるいなあみたいなく@@>思った、田舎のこう男々した感じの男の人が好き、

O: ああ<hx>

S: じゃけん、なんかなよなよして、みんな女みたいになりやがってみたいなの
[<@@@>

O: [<H@@@@@H>

談話14では、Sの発言が非常に重要となる。Sは、気軽に「すんなり」と「ほめ言葉」を言える男性に対して、「なよなよした」、さらには「女みたいな」印象を受けている。これまでの談話同様、ここでも、女性と「ほめる」という言語行動とが密接に関連している。Sの発言や、またその発言がOにより「ああ」と納得されていることから、日本の社会では、「ほめる」という行為が女性をイメージさせるという考えが強く含意されている。

(35) 【談話15】「弱くなる男」

⇒ R: だいぶ女性に、弱くなってるよね、男のほう、

S: 女化してきよる気がするなあ、

R: うん、ほんまにそれは女化しとると思う。

Rの最初の発言に、「弱くなってる」というのがある。談話を文字化する際に、不明な発言の確認を行

う可能性があることを記載し、この文脈での「弱い」とはどのような意味であるのかをRに聞いてみた。すると、ここでの「弱くなってる」というのは、「男らしさが出せない」という意味で用いたという説明を受けた。「～らしさ」というのは、ジェンダーを語る際にとても重要となる。なぜならば、「らしさ」とはその文化・時代・場所でのジェンダー・イデオロギーと深く関係しているからである。この説明を解釈すると、「ほめる」=「男らしくない」、「ほめる」=「女らしい」ということになる。「女性性」と「男性性」とが「ほめる」という言語行動と深く関わっていることを示している。

6 結語

以上、様々な談話を通して、「ほめる」という言語行動にまつわるジェンダー観を見てきた。ほとんど全ての談話に共通して見られるのは、(i) 女性は「本能的」に「ほめる」行為を「抵抗なく」行うことのできる主体であること、(ii) 対照的に男性は「ほめる」行為に「抵抗」を感じ、「ほめる」ためにはワンステップ踏み出すことが必要となることである。女性と男性が対照的に捉えられる傾向が一貫して観察された。また、女性と男性それぞれを均質化して理解する傾向も見られた。このような視点では、談話9で示されているような、「公的」、「私的」という社会的区別で異なる反応を見せるような多様性のある主体を説明することはできない。例えば、寿岳(1979)は、同一人物でも「ふだんとよそゆき」でそれぞれ異なることば遣いをするを指摘している。我々は、一人ひとりの主体を、様々な社会的状況を加味して多様な言語行動を能動的に行う存在と考える必要がある。

しかしながら、談話の多くの発言から読み取れるのは、女性=「ほめる」という強固な日本におけるジェンダー・イデオロギーである。今回の談話会では、このようなジェンダー・イデオロギーが自然化されている日本社会の現状が垣間見えた。「ほめる」という言語行動が、ジェンダー・アイデンティティとなっていることも窺える。つまり、「ほめる」行為を行うことで、ある主体が「女性である」という主張を行うことができるのである。しかし、各参加者が日々の経験を通して、「ほめる」という行為が本質的に女性に備わっているものだという認識を持っていることから、「ほめる」行為を女性全員に強要させる危険性を孕んでいる。そのため、様々な社会的文脈に応じて、主体的に多様な行動をする女性に対して、女性なのになぜ「ほめない」のかという責めを生んでしまう可能性もある。このような発言が自然と繰

り返され、社会で許容されていく中で、誤った女性性・男性性というものが社会で構築されていくと言える。

- (35) Gender is the repeated stylization of the body, a set of repeated acts within a highly rigid regulatory frame that congeal over time to produce the appearance of substance, of a “natural” kind of being.

Butler (1990: 32)

我々は、知らず知らずの間に、偏ったジェンダー・イデオロギーに出会い、問題にしないまま見過ごしている。日々さらされているそのようなジェンダー・イデオロギーにまず気づき、自らの発話に反映していく努力が期待される。女性・男性という性別でその人の言語行動を規定することのない社会が望まれる。

* 今回の論文作成にご協力頂いた、千代延正子、中島安奈、原大輔、藤村和道の各氏に心より感謝する。

APPENDIX

「談話資料表記」

C :	発話者(仮名)
X :	発話者が特定できず
複数 :	複数の話者による発話
[	同時に発せられる発話
=	発話が間もない状態で続く
,	平常イントネーション
?	上昇イントネーション
。	下降イントネーション
—	延ばされた音節
<FF>	大きく発せられた発話
<PP>	静かに発せられた発話
<CRCR>	徐々に大きく発せられる発話
<DIMDIM>	徐々に静かに発せられる発話
<AA>	早く発せられた発話
<LL>	ゆっくり発せられた発話
<QQ>	引用
<HH>	高く発せられた発話
<DD>	低く発せられた発話
<SS>	強く
<@@>	笑いながら発せられた発話
	(@の数は時間:秒を表している)

<咳き込む>	せきなど
<h>	息の吸い込み
<hx>	息を吐く
<XXX(2)>	聞き取れない発話2秒間
<qq(地名・名前)>	プライバシーのため地名や名前などの代わりに表記
(2)	秒単位で沈黙を示す

参考文献

- Brown, Penelope and Stephen Levinson (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Butler, Judith (1990) *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, Routledge, New York.
- Cameron, Deborah (1994) “Verbal Hygiene for Women: Linguistics Misapplied?,” *Applied Linguistics* 15(4), 382-398.
- Cameron, Deborah (2005) “Language, Gender, and Sexuality: Current Issues and New Directions,” *Applied Linguistics* 26(4), 482-502.
- Coates, Jennifer (1996) *Women Talk: Conversation Between Women Friends*, Blackwell, Oxford.
- Eckert, Penelope and Sally McConnell-Ginet (1992) “Think Practically and Look Locally: Language and Gender as Community-Based Practice,” *Annual Review of Anthropology* 21, 461-490.
- Eckert, Penelope and Sally McConnell-Ginet (1999) “New Generalizations and Explanations in Language and Gender Research,” *Language in Society* 28, 185-201.
- Goffman, Erving (1967) *Interaction Ritual: Essays on Face-to-Face Behavior*, Anchor-Books, New York.
- Herbert, Robert (1990) “Sex-based Differences in Compliment Behavior,” *Language in Society* 19, 201-224.
- Holmes, Janet (1986) “Functions of You Know in Women’s and Men’s Speech,” *Language in Society* 15, 1-21.
- Holmes, Janet (1988) “Paying Compliments: A Sex-Preferential Politeness Strategy,” *Journal of Pragmatics* 12, 445-465.
- Holmes, Janet (1993) “New Zealand Women Are Good to Talk to: An Analysis of Politeness Strategies in Interaction,” *Journal of Pragmatics*

- 20, 91-116.
- Holmes, Janet (1995) *Women, Men, and Politeness*, Longman, London.
- Johnson and Roen (1992) "Complimenting and Involvement in Peer Reviews: Gender variation," *Language in Society* 21, 27-57.
- Lakoff, Robin (1975) *Language and Woman's Place*, Harper & Row, New York. [かつえ・あきば・れいのるず (訳) 『言語と性－英語における女の地位』 有信堂, 1990]
- Leech, Geoffrey (1983) *Principles of Pragmatics*, Longman, London.
- Pamela, Hobbs (2003) "The Medium Is the Message: Politeness Strategies in Men's and Women's Voice Mail Messages," *Journal of Pragmatics* 35, 243-262.
- クレア・マリィ (2007) 『発話者の言語ストラテジーとしてのネゴシエーション行為の研究－切り抜ける・交渉・談話・掛け合い』, ひつじ書房, 東京.
- 宇佐美まゆみ (2001) 「ポライトネス理論から見た＜敬意表現＞」『月刊言語』30 (12), 大修館.
- 宇佐美まゆみ・阪本俊生・滝浦真人・橋元良明 (2001) 「ポライトネス理解のためのキーワード集」『月刊言語』30 (12), 大修館.
- 寿岳章子 (1979) 『日本語と女』, 岩波新書, 東京.